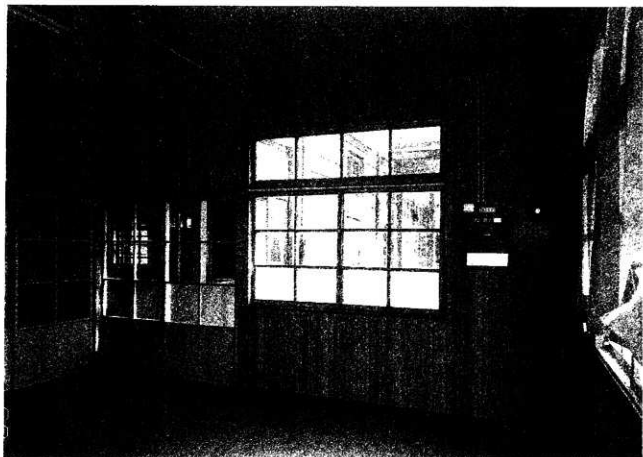
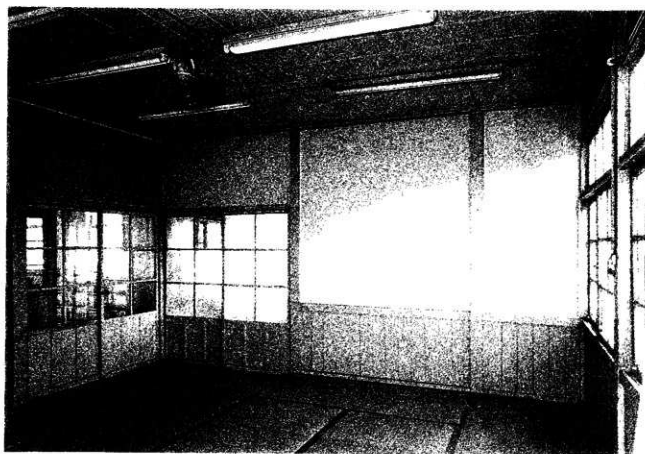
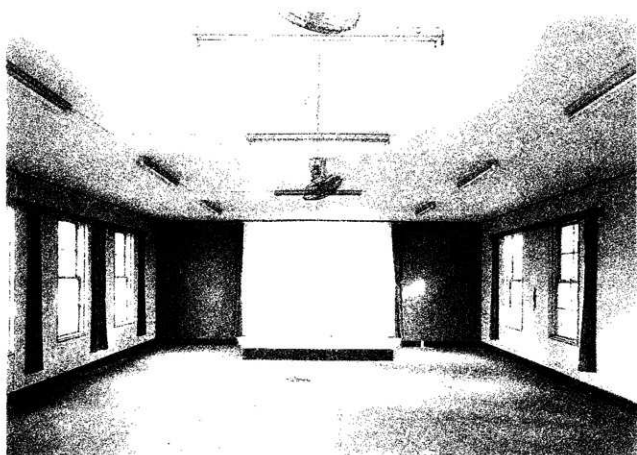




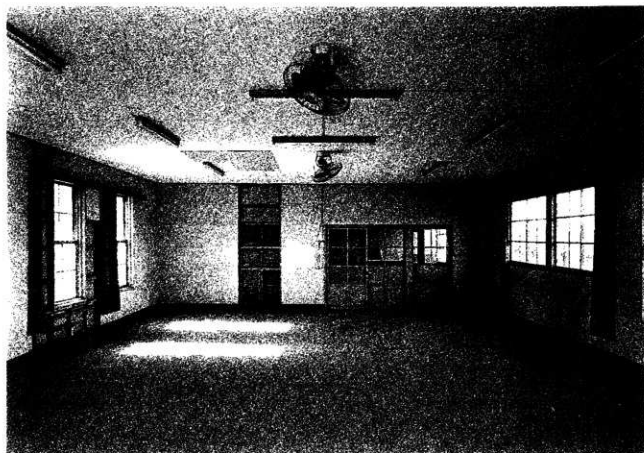
15 1階事務室（南西より見る）



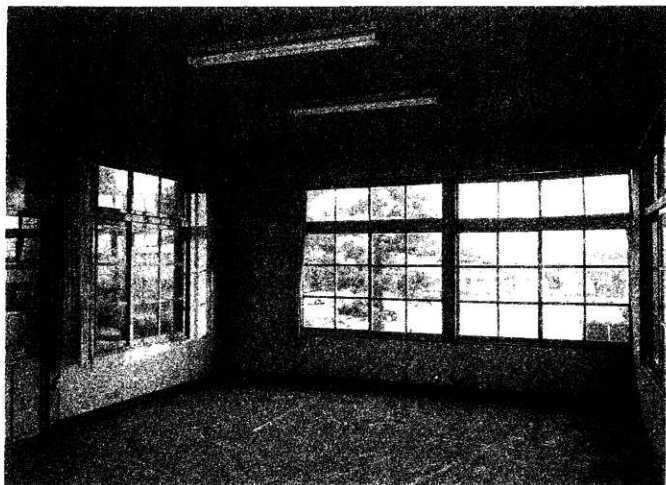
16 1階郷土資料室（北西より見る）



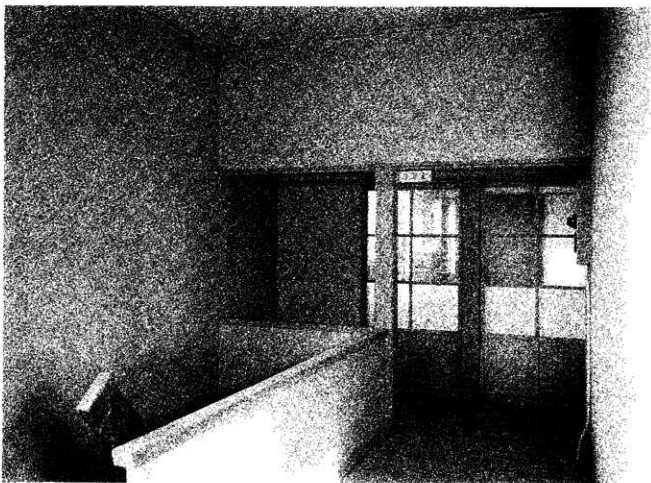
17 2階学習室（西より見る）



18 2階学習室見返し（東より見る）



19 2階市史編纂室（北西より見る）



19 2階階段室（南西より見る）

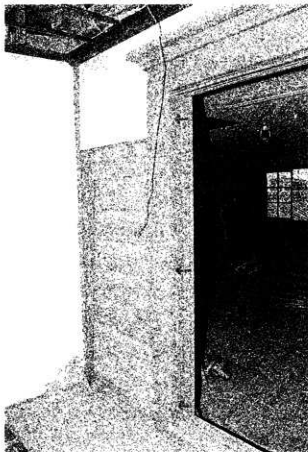


写真 9-15

和室内部の漆喰壁を掻き落としたところ、
風蝕した下見板が残されていた。
窓枠には鋸歯を取り付けた痕跡が残る。

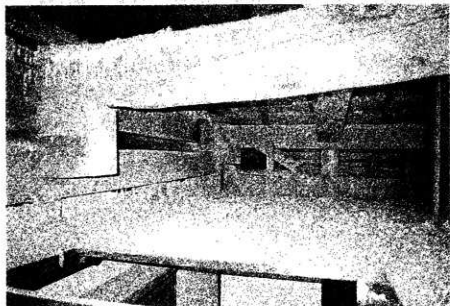


写真 8-15

左が主体部、右が玄関ポーチ
の小量組。明らかに右の小量
組の部材の方が新しい。



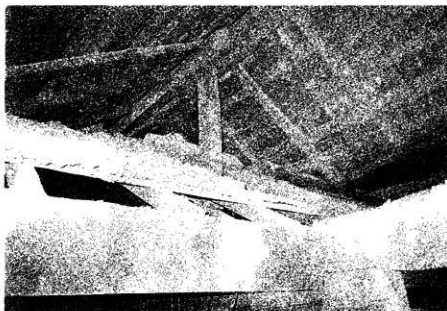


写真-8-16

主体部壁残の瓦のみを取り除いて空間ボーチ屋根を付設した結果、
主体部壁残の野地壇上には残瓦葺の葺土がほぼそのままの形で残される。

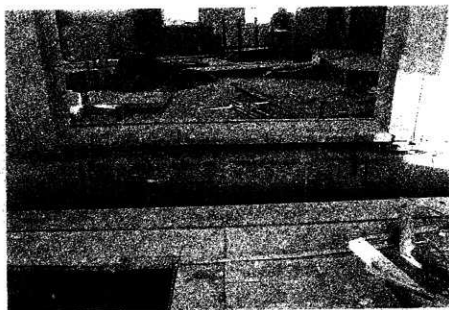
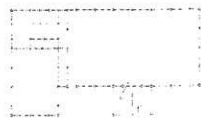


写真-16-3

隅り場床組の痕跡とおもわれる大引・根太仕口が残る。



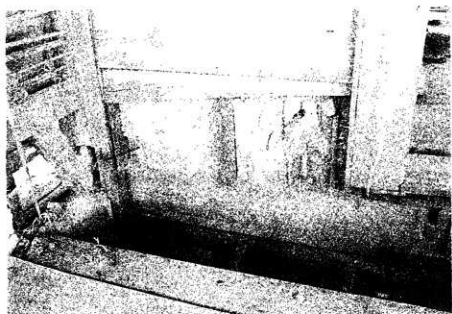


写真-16-4

踊り場床周囲のバラベツと推察される部材の取付仕口が残る。

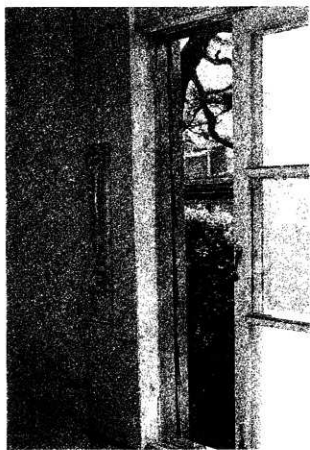
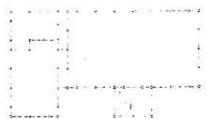
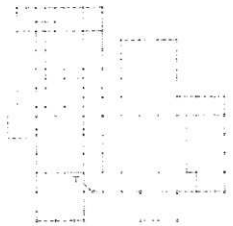
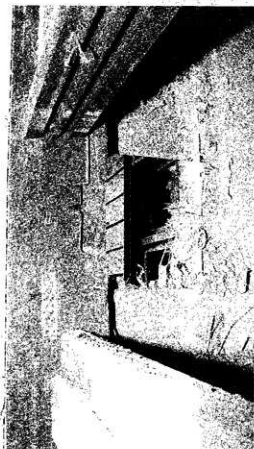
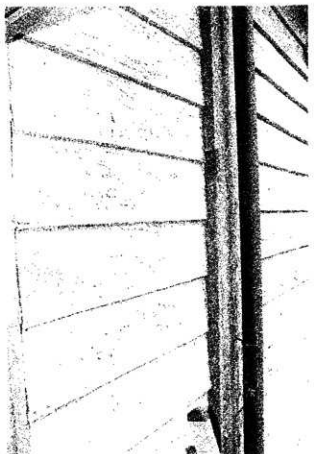


写真-6-10

下見板の切り溝の残る向きから、当初の建物規模がさらに西方（写真右方向）へ延長していたことがわかる。



薪木掛を取り付けていた仕口と釘が残存する。



同上柱の反対の面。

薪木掛より上部には下見板の張り附が残る。



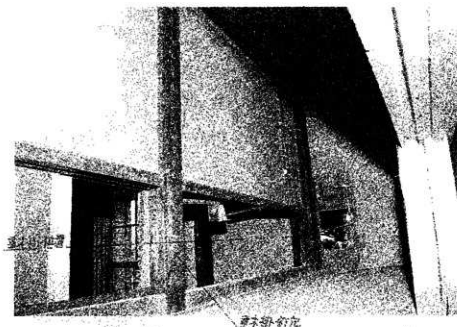


写真-9-E

垂木掛より上部には下見板を打ち付けていた釘穴が残る。

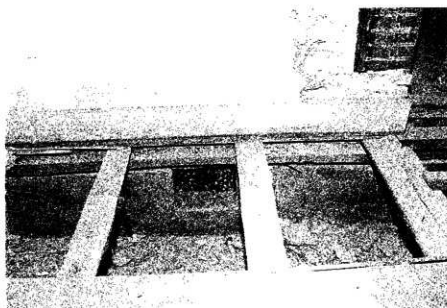


写真-6-54

床下には布基礎と床下換気口の化粧金具が残り、当初の建物の外周であったことを示す。



- 痕跡5 -

写真-6-30

柱の張り被せ板を取り外した状態。
壁貫穴と間渡穴（いずれも横木）
がみられる。

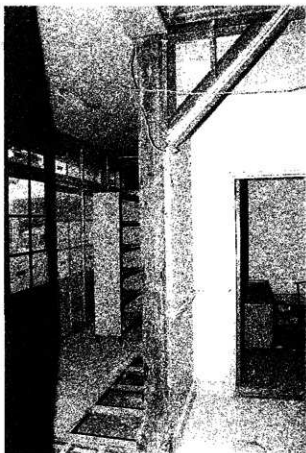


写真-6-31

同上柱の外面。下見板を取り付けていた釘穴が残る。

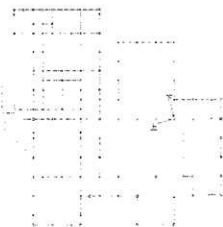


写真-7-9

勢居横目達仕口と上がり箱大入仕口が残る。
勢居より上には壁貫穴・間渡穴が残る。

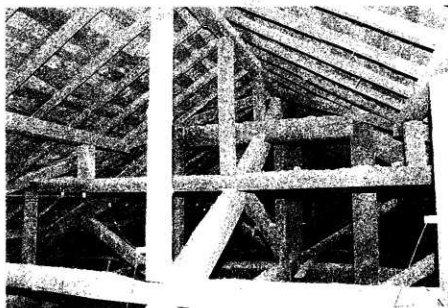
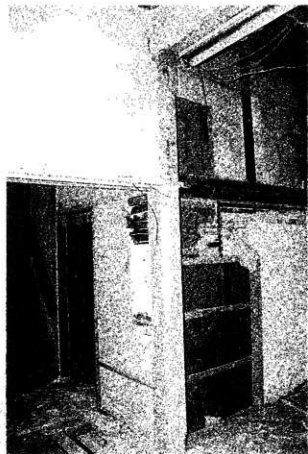


写真-10-13

主体部西端部の小屋組はトラス組の寄棟造として完結する。
桁・母壁の上端には実際に垂木を取り付けた切り欠きと釘穴が残る。



図跡7

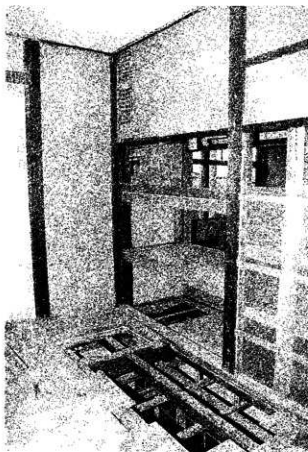
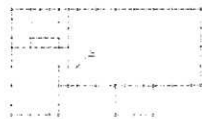


写真-9-35

主体部2階の西端の柱は銅鎧上に建つ。



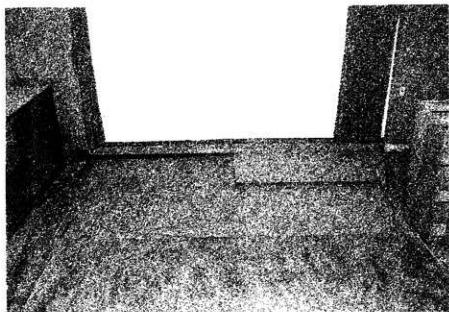


写真-7-7

2階学習室のステージを取り外した状況。

左が上がり口の開口部で摺戸が入っており、右は摺戸を引き込む戸袋。ステージの設置と、床のフローリング張りとは同時期の仕事とわかる。

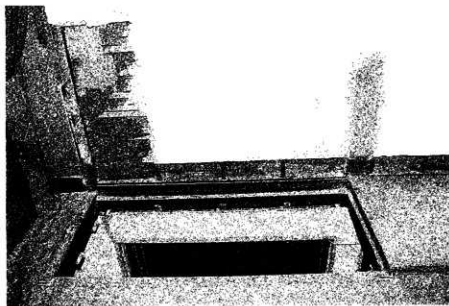


写真-7-27

開口部周囲に残る手摺の痕跡。

（赤チョークが当初の痕跡で、黒木されている。）

（白チョークは改造により一度手摺を付け替えた時のもの。）

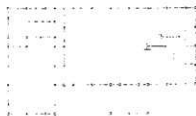


写真-9-29

壁貫穴及び間渡穴の痕跡。
いずれも埋木されている。

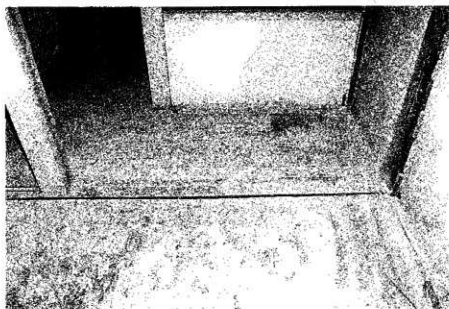
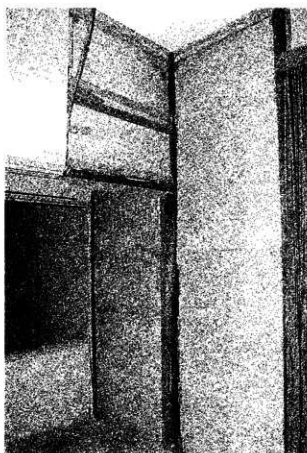


写真-9-31

敷居（原施）上端に残る痕跡。
縦貫穴及び間渡穴（いずれも埋木されている）。



写真-9-10

内装ボード材を取り外した状況。

土壁が残るほか、柱・窓枠材はいずれも、
ペンキ塗りが施されていない。

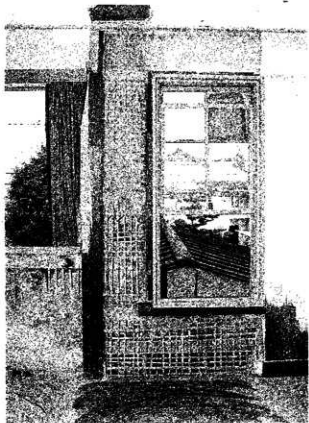
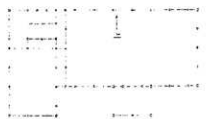
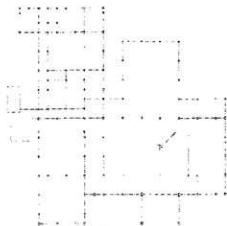


写真-6-1

天井の内装ボードを取り外した状況。当初の根太天井が確認できる。



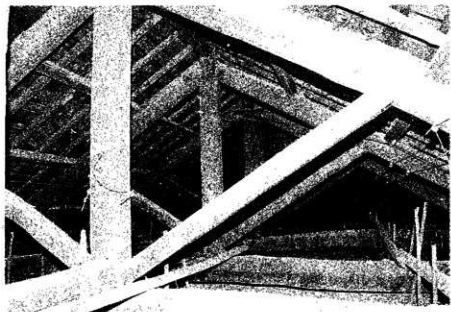


写真-10-1
主体部の小屋組。トラス組である。

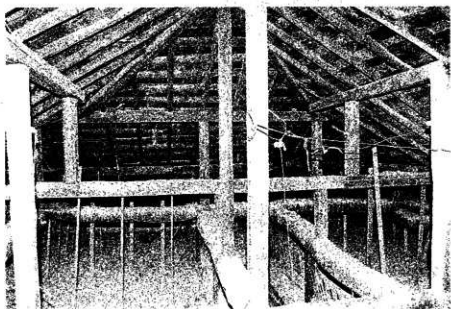


写真-10-16
翼突出部の小屋組。
主体部のトラス組とは対照的に、小屋梁と束を用いる和小屋形式である。

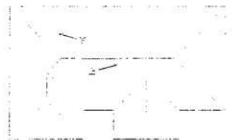




写真-9-20

主体部（左）に対して増築された西翼突出部（右）とを境として、下見板の張り方に相違がみられる。

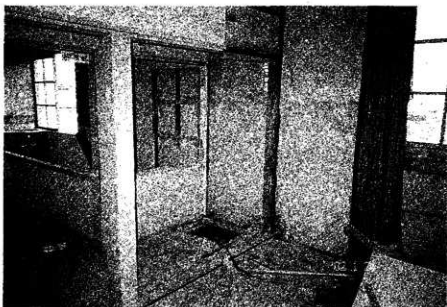


写真-9-9

主体部2階西端の柱列。いずれの柱も壁貫穴・間渡穴が通木されている。

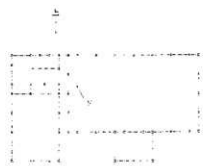
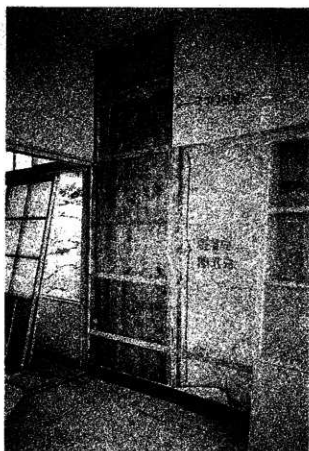


写真-8-12

幅3尺の板下の痕跡。

竿後天井と、壁の漆喰塗が残る。



8-11

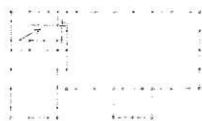
写真-8-11

物入れの背後となる階段室との境には、壁貫穴と間渡穴が残る。

物入れ内部は土壁とせず、板壁としていた。

板垣・天井透得仕口も確認できる。

- 痕跡 14 -



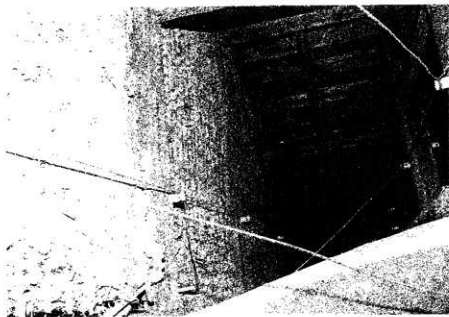


写真-10-32

西翼2階部と後方の平家建部との小屋裏の取り合い。
土壁は片面塗りで、柱の風蝕もみられない。

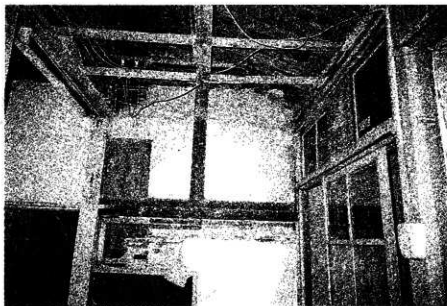


写真-3-21

庇天井が西翼後方平家建部に取り付いていた痕跡。
左の主体部側柱には天井廻縁が、右の庇軒内面には天井板残りが残り、斜めの天井を張っていたことがわかる。
次編の土壁には、天井廻縁が取り付けられていた位置に漆喰の塗り残しが斜めに残る。

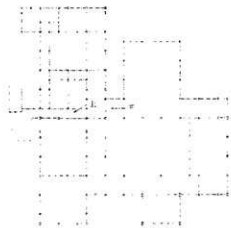


写真-7-1

庇柱に取り付けられていた張り披せ板を取り外した状況。
中敷居、窓下の壁貫穴及び間渡穴、窓下照押えの
据輪欠きの仕口が確認できる。

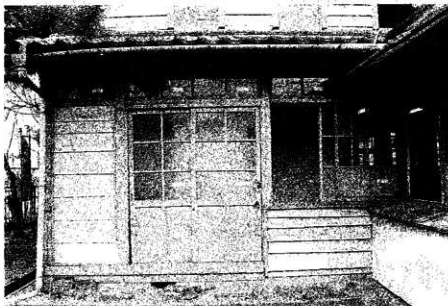
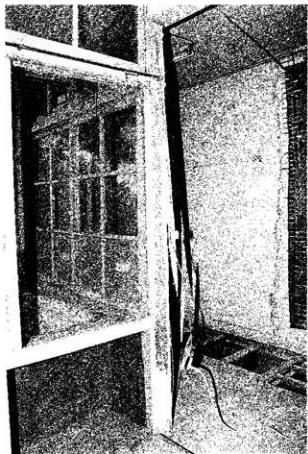
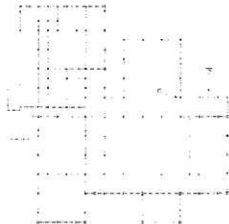


写真-10-22

突出部背面底に設けられた現状の出入口。
柱内面には張り披せ板が取り付けられている。



柱の張り被せ板を取り外した状態。
中敷房機目逢、窓下の壁貫穴及び間渡穴の仕口が残る。
窓下の両押えは切断されている。

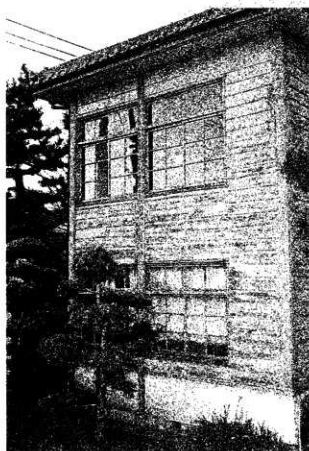
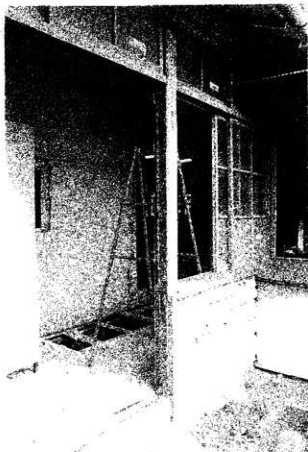
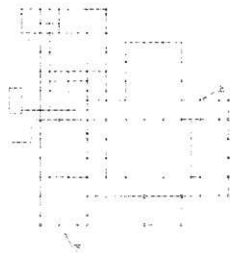


写真-2-24

この西翼突出部の窓の窓庇は、主体部背面窓の窓庇に一致し、
寛政期に建てられたものと考えられる。



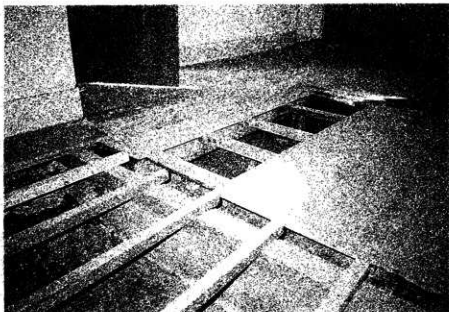


写真-3-2

フローリング張り下に残る板敷き（児童室）



写真-1-24

リノリウム・フローリング張り下に残る板敷き（主体部庇）

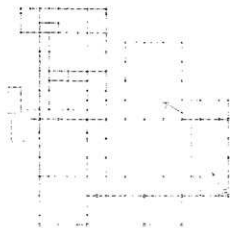




写真-4-21

リノリウム下に残るフローリング張り（開架室西側廊下）

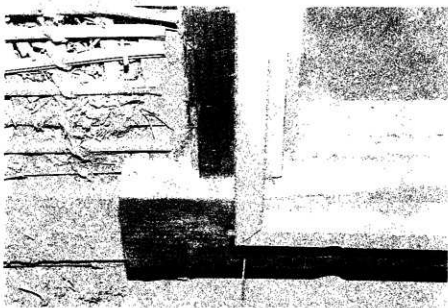


写真-9-9

上げ下げ窓内側の窓枠はペンキ塗りが施されていない。

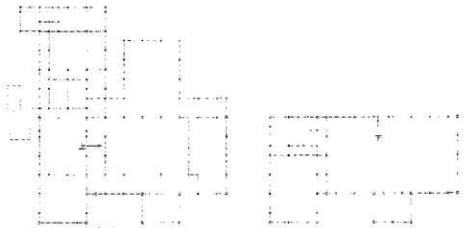


写真-2-20

アルミサッシに改造された窓

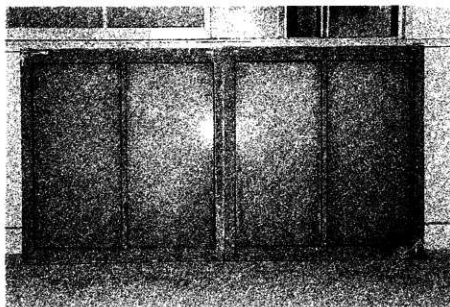
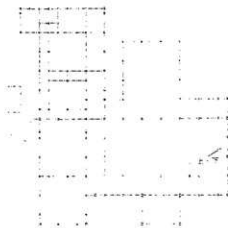


写真-10-30

高上位置に建て込まれていた当初の建具（取り外して保管されていたもの）



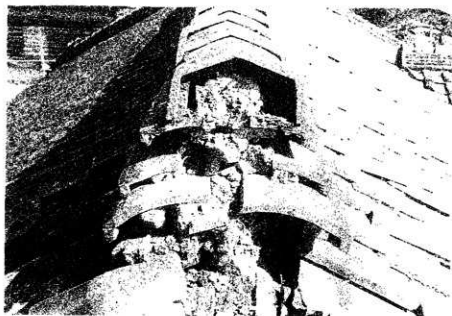


写真17-9 大棟断面状況



写真17-13 大棟断面状況

大棟は大名瓦葺みで肌髪斗瓦2段、割髪斗瓦3段、上段を角
 雁振で収めている。棟土は葺土と同様のものを使用し、内に
 瓦片を入れている。特に銅線で緊結していない。
 瓦質は比較的弱く、産地は遠州及び三州と思われる。



写真17-16 破瓦面の状況

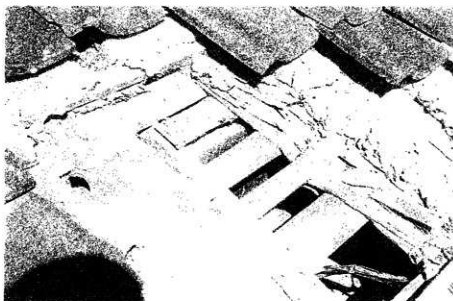


写真17-18 屋根下地の状況

野地は垂木土に小舞打ち、杉皮葺（土留葺）を施した後、葺きを筋置きとして平瓦を葺いているが、平瓦は小舞より緊結されているのではなく、葺土の上に置いたのみである。

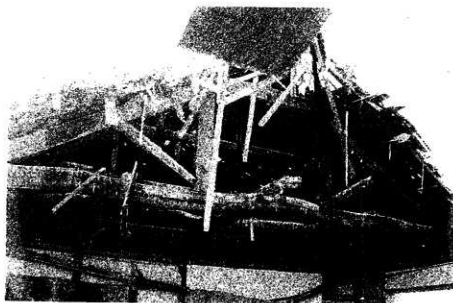
葺土を留める土留棧は竹、木が使用され、杉皮葺の押さえと兼用している。

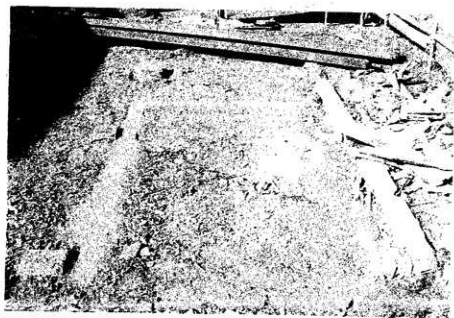




小屋組は二種類あり

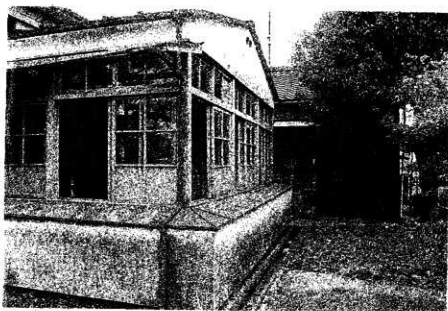
トラス構造としているが、壁梁は和風の曲り材を用い、梁間（4、5間）に入り、トラスの又首梁は中央棟まで延びず、棟両端の二重梁までのものと棟まで延びる二種類がある。



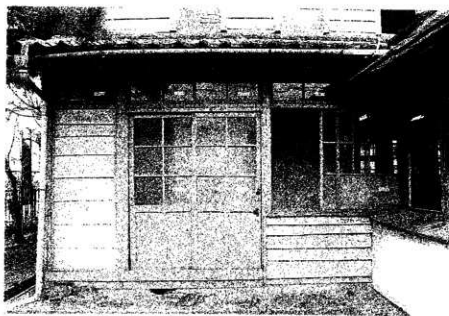




参考館室東向外觀



参考館室北南向観



館室入口